

落第騎士と鬼の英雄譚

難波01

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神が謝って死なせた青年は、「落第騎士の英雄譚」へ！

第二の学園ライフは非現実と格闘、戦国魔王に振り回されながら送る波乱万丈の学園ライフ！

目次

プロローグ	1
部屋割りの真実	7
新学期ですよ！	14
ゲスいWデートにはトラブルがつき物です	21
Wデート÷解放軍×学生騎士∥後は分かるな？	28
友が齎す修羅場	36
鎧と武者	41
実家ですよ！	49

プロローグ

己の魂を武器に変えて戦う時代。

現代の魔法使いと呼ばれている伐刀者^{ブレイザー}。

伐刀者を育成する養成学校『破軍学園』には落第騎士と呼ばれる少年と「鬼」を継承する少年がいる。

黒鉄一輝、それが落第騎士と周りから呼ばれる少年の名。

明智和真、現代の魔法使い伐刀者^{ブレイザー}が存在する世の中で恐らくただ独りであろう「鬼」に魅入られ、只管に魔を狩る少年。

早朝、川原で二人は一定の間合いを取って互いの獲物呼び出した。

「来い、陰鉄！」

一輝が日本刀を掌から引き抜く。

「起きろ、雷電」

和真の手首から肘に駆けて覆う生物気質な籠手、手の甲辺りには青い水晶が埋め込まれている。

バチバチと音を立て、放電^{スパーク}する水晶。

その放電音を皮切りに和真は腰辺りから独特の装飾が施された日本刀を引き抜く。

固有^{デバイス}霊装、正式名称を唱えないと現れない己の魂を具現化した武器。

和真の固有霊装、雷電・・正式には「雷斬刀」と伝え聞く雷を司る鬼の宝刀が、和真本来の固有霊装と溶け合って生まれた一振りだ。

互いに誰かに習うわけではない、見て盗み、自分の物にしてきた剣術。

「やるな、相変らず見てからの反応が早い！」

「和真こそ、未来予知でもしているの？僕の狙いを見透かしてっ」

それは、傍か言えば猿真似と言われるだろう。時には贗作、偽者とも。

体を低くし、胴薙ぎの一閃を避ける一輝に振り上げた雷電を振り下ろす和真。

それを僅かに重心をずらし、避ける一輝は重心をずらしながら突きを放った。

「その反射速度、可笑しくない?」

一輝の突き出した刃は、刃によって防がれていた。

それも刃同士をぶつけ合う形で。

「お前の洞察力には負けるさ。」

明智和真、実の所を言うところの世界の出身ではない。所謂、転生者。

転生者は神によって特典を与えられると相場は決まっているが和真はチートのような特典を得たわけではない。

神は誤爆で殺してしまった詫びに「落第騎士の英雄譚」の世界へ転生を申し出た。

和真は断る道理は無く、むしろ繰り返される単調な毎日から開放されると胸を躍らせていたほどだ。

神が和真と言う人間の能力を弄ったのはとても単純、身体能力とこの「落第騎士の英雄譚」と言う世界において魂を武器化する固有^デ霊装^{バイ}だ。

日本と言う島国に残る数少ない神秘を融合させると言う物。

そう、多くの魔を封じてきた籠手を魂と同化させたのだ。

「……アンタ、そこにあつた籠手は!?!」

「落第騎士の英雄譚」その世界で聞く第一声は、山奥のお堂に響く少女特有の悲鳴に近い叫び声だった。

この世界で、ただ語り継がれていない武者の存在がある。

“鬼武者”

鬼に憑かれた人が幻魔と言う魑魅魍魎を討ち果たす姿をそう呼ぶ。転生直後の和真は、固有^デ霊装^{バイス}を頭に響く神の声どおりに展開してみると左手に籠手が現れ、遅れてきた白髪の青年が目を見開いて驚いたのを覚えている。

白髪の青年、歴史の教科書にも載る僧侶・天海は、12歳まで年齢・肉体退行を果していた和真をかつての友の協力の下保護。

その後、天海は二年掛けて鍛え上げた。

そして、世界を知ってもらうと旅をさせたのだ。

二年前、小国・ヴァーミリオンの貴族が巻き込まれたテロ事件があった。

自動小銃で武装した二十人、五人の伐刀者^{ブレイヤ}で構成されたテログループはエツフェル塔付近のショッピングモールを占拠し、逃げ遅れた姪く50人前後の人質と供に籠城した。

要求は、フランスに服役している解放軍^{リベリオン}の釈放及び身代金の要求。巻き込まれた貴族の名はエルフェルト・ヴァレンティン。

ヴァーミリオン王国、王族とも縁深いヴァレンティン家の一人娘はそのテロに巻き込まれて運命的な（エルフェルト限定）出会いを果すことになる。

「良いか？お前等の命はフランス政府に掛っている。政府が応じて仲間を解放したら・・・そんな時は逃がしてやる」

各ブースに分散された人質に脅かす伐刀者^{ブレイヤ}。

その時のエルフェルトは、ただ十四歳の少女でしかなかった。

「うっ、ママァー!!」

子供が泣き出すと途端にテロリスト達は機嫌が悪くなる。

「煩せえガキだな・・・殺りますか？」

「駄目だ。」

リーダー格は頑なに下っ端の行動を袖須湖とは無かったが、自分の

演説を邪魔された事への苛立ちは顔に出ていた。

「ママ！ママァー!!」

「黙れっつてんだろっ！このガキ!!」

独りが徐に銃を振り上げる。

「止めなさい！」

エルフェルトが声を張り上げてテロリストを制しする。

銃と言う鉄の塊が子供を殴打する事はなかったが、代わりにエルフェルトが殴られて気を失う事になる。

エルフェルトの正体に気がついたテロリストはエルフェルトを人質に逃走を図ろうとしたが、一人の少年に人質の奪還までされてしまった。

エルフェルトは少年に抱えられた状態で目隠しと猿轡から開放され、彼女が目にしたのは、ブレイザー伐刀者と言うより、魔導騎士と言うよりも侍と言う言葉がしっくり来る少年だった。

「大丈夫？良く頑張ったね」

彼女の王子様が現れた瞬間だった。

そして、エルフェルトは一目惚れして決心した。

彼を振り向かせよう。

両親を説き伏せ、彼女は動き出す。

そう、恋する乙女はターゲットを射止めんが為に。

二年後。

空港には記者たちが詰め掛けていた。

ヴァーミリオン王国の第二皇女と同国貴族が日本に留学する、その取材の為だ。

手を振るステラ・ヴァーミリオンとエルフェルト、記者たちのありきたりな質問を笑顔で回避した彼女たちは空港ロビーを抜けた先にスタンバイしていた黒いリムジンに乗り込んだ。

「ようこそ、ステラ第二皇女。エルフェルト嬢」

待っていた黒いスーツ姿の女性、黒乃理事長。

新たな破軍学園の理事長だ。

「よろしくお願ひします。理事長先生」

「理事長先生、例の件は大丈夫ですか？」

皇女ですら条件を出さなかつた部屋割り、エルフェルトは「お願い

” という形で理事長に無理を承知で頼んだのだ。

「ええ、ヴァレンティン嬢。鬼とのルームシェアですよ」

その言葉を聞いた時、ステラは首を傾げるが直ぐにステラも理解する。

新理事長による新たな部屋割りの基準を。

いつも通り、和真は一輝とのトレーニングを終えて破軍学園の学生寮・自室のドアノブに手をかける。

「おい和真！誰じゃあのべっぴんさんは!？」

ドアを貫通して現れたのは、魔王と名高い織田信長。

色々事情が在って、和真の固有霊装デバイスの片割れである鬼の籠手に封印されていたノブ（以後織田信長の愛称）は、長い年月で封印が弱まったか何かで幽霊のように波長の合う人間にしか認識されない存在でいる。

端的に言うとな和真に憑いた幽霊だ。

「は？何を寝ぼけていらつしやるノブ。アレか？戦国ジョークか？男女が同室な分けないだろ」

相手にしたら疲れるだけなので相手にせず、和真がドアを開けると、

「やっと会えたね！明智様!!」

飛び出してきた一級品の美少女、出るところは出て、絞まる所は絞まる。一言で言えば我が仮ボディの少女が飛びついてきた。

男なら喜ぶ展開、つうか喜ばん奴は男じゃない。だがしかし早朝と

訓練後の疲労と空腹から満足に頭が回らないこの男。

「ふべらばっ!？」

流れるまま後頭部を廊下に強打し、意識を手放す。と同時に隣室から少女の甲高い叫び声が響いた。

和真が床に頭を強打して意識を手放す数分前、一輝もまた危機に遭遇していた。

「……………」

「……………」

(なんで……………なんで僕の部屋に女の子がアア!?)

部屋の扉を開けると、紅い髪をした少女が制服に着替えようとしていた。

生まれたままの姿をさらけだし、ワガママボディーの持ち主の少女は次第に顔を赤らめていく。

「いや……………や」

「待つて!……………このまま叫ぶのはまだ待つてほしいんだ!確かに君の気持ちは分かる……………見られたら恥ずかしいよね」

さわやかな笑顔で語る一輝。

「だから!僕も脱ぐから!これでフェアに……………」

「いやああアアア!!」

—————
パチン!

部屋中に、綺麗な乾いた音が響いた。

部屋割りの真実

東堂刀華。

破軍学園序列NO1.にして生徒会長。

茶髪で長い髪を三つ編みにして二つのお下げが印象的、言うに漏れず我が仮ボディ。

生徒会のごく一部は語る、凜としてNO1.に相応しい振る舞いを行う彼女が歳相応の少女になる瞬間があると。

(久しぶりですね、和真君が学園に戻るとは)

自然と表情が綻ぶ彼女、刀華は和真と同じくして破軍学園に入学して直ぐだったか、実戦の授業から彼を視線が追う様になった。

それから久しく彼は学園に戻らなかった。

暫くして、和真は消えた。

半年もいなくなった彼が何処で何をしていたか知る事になったのはテレビの報道。

確か、当時の見出しは「最強さいしやくのFランク」だったか。

各国を転々とし、学生ながらも固有デバイス霊装一本で銃弾飛び交う戦場を駆け抜けてテロリストを鎮圧する様は鬼のようだとリポーターは語った。

「……何をしてるのですか？」

刀華は極めて冷静である。

ああ、そう冷静だ。明智和真が関わると歳相応さいしやくの対応へ戻ると言う一点を除いて。

「刀華さん？落ち着いてくださると非常に助かるのですか……」

何とか顔だけを動かして状況を理解した和真は、後の展開を知っている。

そうとも、経験則で予測できる。

「何故、女生徒に抱きつかれて鼻の下を伸ばし、腕に当たる感触を楽しんでいたように見えるのですけど？」

「刀華さんには其処までゲスに見えますか!？」

「……問答無用です!」

雷光一閃。

雷光と供に放たれた神速の剣戟をどうやって避けたか？ンナもん決まっている。

「貴女、明智様の何ですか!？」

エルフェルトが固有靈装デバイスブラッティギフト血塗られた贈物を展開、銃型で、二丁の短銃を連結させる事で狙撃型になる連射性の高い自動小銃型で受け止めたからである。

「何って貴女こそ！」

「私は明智様の婚約者ですっ!!」

爆弾が爆発した。

「ふむ、明智も隅に置けんな。ヴァレンティンだけでなく生徒会長にもモテていたとは」

騒ぎを聞きつけてか、不敵な笑いを浮かべて現れた黒乃理事長が銜えタバコを吹かしていた。

さて、入学式まで数日ある。

ま、当日に越してきて直ぐに式典なんてハードスケジュール誰が考案しようか？

「相部屋ですか!？」

「そうだ。今年から男女同棲も辞さない体裁をとる事にした。明智は紙面上の数値はF、ヴァレンティンの数値は極めてAに近いB。黒鉄も同じ理由でヴァーミリオンと同室だ。」

理事長から聞かされた理由わけに愕然とする和真。

「まあ、ヴァレンティンの場合はPTSD治療の一環と言う事もある。お前ならトラウマの原因が何か、解るな?」

黒乃理事長の言うエルフェルトのトラウマ、ソレは間違いなく二年前のショッピングモール襲撃事件だ。

自分の身分を明かし、逃走時に人質を買って出た事で政府に、娘よりも世間への体裁をとった家への失望が根源のトラウマ。

「彼女にとってお前は英雄ヒーローなのさ。映画のワンシーンのような状況で助け出してくれたお前は、エルフェルト・ヴァレンタインと言う少女のな……」

「成る程、それなら俺はこの決定を謹んで受けましょう。」

「そうそう、彼女が『婚約者』と断言したことについても教えておこう。両親はヴァレンタインの精神の安定のために一度はお前を迎えようとしたそうだ」

「……はい？」

「事件終幕直後、ヴァレンタイン公爵にお前の名を教えた人物がいたのさ。それはそうと黒鉄の弁護をしてもらわないとな」

「そんな理事長の振りから、直立不動で立つ一輝を見やると見事に紅葉をこさえていた。」

「アレは痛い、絶対痛い。」

「部屋に戻ったら女の子がいて着替えを直視？」

「そうなんだよ」

「んで自らキャストオフ……はいギルティ」

「僕見捨てられた!？」

「明智、お前も似たような物だろう」

「いつものノリでボケをかますとしつかり乗る一輝。」

「そんな和真に黒乃理事長がツツコミを入れた。」

「いや、跳び付かれるのと覗きは別物ですからね？」

「良いのか？このままでは東堂生徒会長はお前に説明を求めろぞ」

「黒乃理事長の一言を聴いた瞬間、和真の顔は青白くなる。」

「それはもう死人の顔色そのものだが、刀華が暴れた場合和真の斬殺だけでは済まない。」

「察備え付け家電が全部屋一式駄目になる。」

「和真、東堂先輩と何かあったの？」

「よし、一輝。弁護はしてやるから後で助けろ、良いな？」

「この一件に黒鉄に非はないが責任は取ってもらうぞ？」

「黒乃がそう告げると理事長室の扉が開く。」

「失礼します……ッ！」

「……ッ！」

入って来たのはステラ・ヴァーミリオンだった。ステラは一輝と視線が合うとキツと睨む。とっさに一輝は謝罪を始める。

「ごめん。あれは不幸な事故で覗こうとしたわけじゃないけど……ごめんなさい」

「……潔いよね。これがサムライの心意気なのかしら？」

「口下手なだけだよ」

一輝の言葉を聞きステラはある提案を思い付く。

「だったらハラキリでこの一件を無しにしてあげるわ。どうかしら？」

「うん！それなら……え？」

ハラキリ、それはつまり切腹だ。

「日本男子にとってハラキリは名誉なんですよ？ 姫であるアタシにこんな事して……」

「ちよつと待つてよ！ そんな事までして命は払えないよ!? たかが下着姿を見ただけでそんな……」

「よし。明智、実演しろ」

「茶化さないでください理事長。後嫌です」

そんなやり取りで一輝の眩きは聞こえていないかに見えた。

「た、たかがですつて……」

そんな事は無い、そうは問屋がおろさない。

次第にステラの周りに炎が燃え上がる。

「じゃあな黒鉄、明智」

危険を察知してか黒乃理事長は去る。

いい去り際だ。と言うか巻き込まれたと内心吐き捨てる和真。

「ちよつと理事長!？」

「覚悟なさい……アンタみたいな変態痴漢無礼のスリーアウト平民は私が直々に消し炭にしてあげるわッ！」

瞳のハイライトが消え、明らかに殺す気満々のステラ。

一輝は今窮地にいる。和真は割とギリギリまで茶化すクセがあるし、黒乃は避難している。

「私の裸をジッと見てたクセに……舐めるように！変態のような眼差しで私を見てたクセにッ！」

「何？そいつは許せん、やっぱギルティ！」

「和真はどっちの味方なの!？」

おどける和真に割と真面目に助けを求める一輝。

「てか、アンタ誰よ!？」

「俺か？通りすがり隣人だ。覚えんでいい」

「まあ良いわ。二人仲良く消し炭になりなさい!!」

「何でさ!?!一輝、どうするんだよ俺までノブと同じ末路をたどるのか!？」

「……だ、だって！ステラさんがあまりにも綺麗だったから……見とれちやっただッ！」

一輝の渾身の一言。

「ふえ!？」

突然の発言にステラは顔を赤くして動きを止める。

「な、なにを言ってるのよバカ!み、未婚の女性に軽々しく綺麗つて……」

あたふたするステラ。

助かったと胸を撫で下ろす和真。

あースプリンクラーで濡れた。

「ヴァーミリオンさんは落ち着いたか？一輝は部屋を間違えていないぞ、多分。」

「はあ?どういうことよ!？」

「あ、言い忘れていたが……」

ここぞとばかりに黒乃が戻って来た。

「君達は同じ部屋だぞ?つまりルームメイトだ。今日からな」

「え……ええええ!？」

一輝とステラの叫びが木霊する。

そして目下、和真の問題は一つも解決していない。

「お帰りなさい、明智様」

そう、エルフェルトの存在だ。

「とりあえず、様付けは止めようか?」

「え? あ、そうだよな。それじゃ何て呼べば」

「所で御主等、何か忘れてない?」

玄関にて、出迎えてくれたエルフェルトに呼び方の訂正を求めると
ノブが現実に戻す。

見たくない、修羅を越える刀華さんとか。

「和真でいいよ、ルームメイトらしいから・・・で、婚約者って何?」

「え? 和真様は「様はなしね?」和君は天海様から聞いてないんですか
?」

目下、刀華は帰っているようで助かったが・・・。

「ごめん、爺さんが何て?」

「二つ返事で書面返してくれたよ? 二年前、あの事件の後直ぐに」

「すまん、確認するわ」

エルフェルトは様子からしててつきり聞いているが忘れていた、と
思っているのだろう

が和真からすれば養父である天海が書面で返信したと言う事実の
方が驚きである。

と言うか一度正月に帰っているのにその辺触れてなかった。

スマフォを取り出し、自宅にコール。

『もしもし? 比叡青空の家です』

比叡青空の家、比叡山麓に天海が開業した孤児院で現在引き受けて
いる孤児は五人。

そして、そこのお母さんの存在の鴉天狗・阿古が電話に出た。

「もしもし? 和真です。『ああ、和坊。左馬介さまのすけなら居ないよ?』よし、阿
古もグルだな? 何で俺が爺さん出して言わないうちに用件
がわかった!？」

左馬介、天海を名乗る前に養父が名乗っていた名前だ。

何で改名したかは知らないが、兎に角当時はそっちの方が都合のい

い事が会ったのだろう。

『えー？だって逆玉じゃない！しかもお嬢さん、和坊にゾツコンなん
でしょ？逃す手は無いつて!!』

「いや、普通そう言うの本人に一言ない!？」

『左馬介もドツキリって言ってたし、本人に会えたんなら問題ないで
しょ?』

「問題しかないわー!」

ああ、駄目だ。

どうやら知らぬ存ぜぬで押し通せない。

『いいじゃん、新婚生活の前倒しだと思って!「し、新婚?!」ありや、
聞こえた?てか本人居るの?』

阿古の一言でエルフェルトはボンツ!と顔を赤くして頬を抑えな
がら「新婚、前倒し・・・」と呟いている。

「そうは言わなかったか?となると彼女の言う事、事実なんだな?」

『そうだよ、因みに二年前から』

「もういい。」

通話を終了し、途方にくれた。

うん、刀華にエルフェルトが許婚発言。コレだけでも十分爆弾なの
だが事実と来た。

可笑しいよね?可笑しいよ、誰か可笑しいと同意してくれ!

新学期ですよ！

二年前のあの時、エルフェルトは伐刀者^{ブレイザー}ではなかった。
悪を挫き、弱きを助ける。

自分可愛さに保身に走る見掛け倒しじゃない自分の身を差し出してまで他人を助ける為に動ける強さにエルフェルトは憧れたのだ。

「アレほどよろたえていたのが嘘の様に穏やかな寝顔……」

漸くスタートラインだと内心呟きながらエルフェルトもまどろみに身を任せた。

新学期、当日。

一輝はステラとルームメイトとして和解し、教室に向かう為に共に部屋を後にする。

「そう言えば、友達も部屋近いのよ」

「そうなんだ。声をかけるの?」

てててつと駆けて行くステラに返答しながら一輝は扉の鍵を閉める。

「所謂オサナナジミでね、昔から世話の焼ける子なのよ……」

ふつと一輝はステラの姿を追って視線を投げると和真の部屋の前で震えるステラが目に入った。そして中から、

「何で俺の布団に潜り込んでんだキミは!？」

「親公認よ?まだ時間あるから」

「無いからね!?もう七時半過ぎるからね?あ……」

和真がルームメイトであろう女子と口論し、声音から見られてはいけない場面を見られたような呟き。

一輝は悟る。

つまり、ステラの幼馴染は和真の同居人だと。

「あ、ステラ。おはよう、同じクラスだといいいねえ♪」

そして恐らくド天然だ。

「な、ななななにしてくんのよっこの変態!!」

「ストライクっ!?!」

そして、和真は新学期早々にリタイアしたと。

入学初日に遅刻・・・語弊があった。

一輝は二回目、和真は三回目の入学式の遅刻は免れた。

「つまり、アンタがエルフェルトの言っていた婚約者・・・」

ステラの言う事はスキヤンダルも良いところだ。

こと貴族の婚約ともなれば、ニュースで取り上げられる。それは他国であろうと同義で、ヴァレンタイン家はヴァーミリオン王側近貴族。

公表されていない許婚の存在が明るみになれば、最高の特ダネである。

「アレが?」

思わずステラは一瞥する。

奇跡的に同じクラスであった四人は、割と窓際の席で屍のように蹲る和真を見た。

「そう、ステラにとってはアレでも私にとっては王子様。分かった?」

「分かりたくないけど、近所だったで言うのは分かったわ」

「もー!ステラも恋しなよ、そうすれば理解できるって」

ステラとエルフェルトが恋愛トークに花を咲かせる一方で(この場合はエルフェルトののろけ)一輝はホームルーム前に和真の蘇生を果した。

「はい、虹〇ス。」

そう、缶コーヒーの差し入れだ。

「お、サンキュー一輝。流石に二年目になると俺の蘇生方法を心得ているな」

「朝から災難だったね？」

そして、入学式当日のホームルームが始まった。

「新入生のみなさーん！入学おめでとーっ！一年一組担任の折木有里です！よろしくね〜！私の事はユリちゃんって呼んでね！」

一人だけテンションの高い有里に和真達を含む生徒達は呆然とする。

「なんか疲れる先生ね」

当然ステラも例外ではない。

去年からいる一輝や和真は相変わらずといった表情で苦笑いを浮かべていた。

「僕や和真は去年からお世話になってるけどいい人だよ有里先生は」

「まあ、一人だけテンションが高いのは多めに見てやってくれ。だけど大丈夫かな？有里先生……」

「？……なにが大丈夫なのよ？」

「ああ、血の雨が降るのさ。比喻とかじゃなくて」

「今日はまず、最初に七星剣武祭について連絡します！本校では今年から能力値による選手選抜は廃止して全校生徒参加の実戦選抜を行って成績上位六名を選手として——」

有里はテキパキと説明して、生徒達に電子端末の生徒手帳の使い方などを説明する。これに始まり次に試合について有里は話し続ける。

「これからは大変だと思うけど、みんな！これから1年全力でがんばろー！！えいえいお……ブフフアアア！！」

『ユリちゃアアアアアん!?』

突然の吐血。生徒達は驚き声を上げた。

「ちよ！吐血したわよ!？」

「病弱なんだよ……一輝、先生を保健室に。俺は血だまりを拭く」

「分かった」

「アタシも手伝うわ」

「あ、私も!」

一輝とステラは席から立ち上がり保健室へと連れてゆき、和真とエルフェルトは血だまりを拭くのであった。

「そして、避けては通れぬ雷様に赴くのであった」

「ノブ、纏めるな!」

「何やってんの? 一人漫才??」

「ああ、ステラ。気にしたら負けだよ、和真の持病みたいな物だから」
ノブは和真以外に見えないし、認知されない。それ故にやりたい放題のノブ。

当然、ステラと一輝の夫婦漫才も鑑賞済み。

「生徒会長から呼び出して何したの? 和君」

「いや、九割がたキミが原因だよ? ルームメイト君」

呼びにきたのは、とまるれんれん 兔丸恋々。

恋々だつて好き好んでハイライトの消えた会長の頼みを聞こうか?
?

「恋々、刀華は・・・つまり?」

「うん。エルフェルトちゃん? の婚約者発言にショックを受けて今自棄食中。会長を止めてあげないと体重増加がマツハだよ!」

「・・・エル、どういう事!」

泣き付いた恋々、生徒会室は生徒会連中にとって憩いの場だ。

恋々だけでなく、漫画だつたりお菓子だつたりお茶だつたりとあらゆる物がそろっている。

そして、恋々の一言に反応したのがステラだ。

「てへっ! つい負けたくなくて」

「・・・アンタはそういう奴だものね・・・和真?」

ステラが振り向くとバイブレーション機能でも搭載しているのかと思うほど和真は震えていた。

それはもうガラスコップ程度粉碎するレベルで。

生徒会室、生徒会長席にはスナック菓子が山積みになっていた。

生徒会のお母さんポジである刀華も人間。極度のストレスから開放されるためにやけ食いする事もしばしば。

そして、経験則で分かる。

和真は死ぬかもしれないと。

「さあ！和真君、死ぬ気で会長をとめてよ！」

恋々が背を押すと和真は踏鞴を踏んで入っていく。

「何しにきたんですか？」

「刀華、自棄食いは止めよう。生徒会室の茶菓子は……」

「聞きよったくなか！」

応接用の長机を越えての一閃。

その軌跡を追うことが出来なかったステラは啞然とし、一瞬で想い人の意識を刈り取られたエルフェルトはキツ！と刀華を睨んだ。

「安心召されよ、幻想形態の一太刀だ。」

割って入ってきた坊主頭の巨漢・破城雷さいじょういかづち、ここで固有^{デバイス}霊装についてももう少し深く触れよう。

幻想形態と言うのは主に疲労という形ダメージを蓄積し、魔術を行使して何らかの特殊ダメージ……例えば炎を食らわしても丸焼けにはならず意識を刈り取られ、気絶するだけだ。

対して肉体的損傷を与えるのが実像形態。こちらは通常の剣と同じく斬れば切傷、炎を浴びせれば焼死体が出来上がる。

七星剣武祭はこの《実像形態》を用いる実戦形式である。と言うのは余談だ。

「ああ！やっちゃったあ……大丈夫ですか!?和真君!!」

ドーナッツを片手に切伏せた刀華は我に帰って大の字になっている和真に駆け寄った。

「大分動揺していらっしやるようですね？」

「うむ、黒鉄も用心した方がよいぞ」

碎城はステラの存在から一輝もこうなるのでは？と忠告すると一輝はその意味を理解せず、刀華の行動に苦笑した。

「センサー、急患だよー！」

生徒会室の左隅、畳一条ほどのスペースをダンダンと叩く恋々。

「今度は何ですか？裂傷？刺殺？殴殺？ま、私に掛ればどんな患者も蘇生してみせまつシヨウ！」

突然、扉のように床が剥がれたと思うと長身の紙袋を被った大男が現れた。その手には身丈ほどのメスを担ぎ、和真を見つけるや否や「またですかあゝ」と呆れた。

幻魔界きつての名医、そして最も破軍学園に馴染んだ幻魔・ファウストが和真にメスをブツ刺した。

「ちよつと!?!」

「人殺し!?!」

その光景にステラとエルフェルトが叫んだが、ぐいっとメスを捻ってファウストがメスを引き抜く。

「相変らずセンサーの治療は刺激が強いなあ。新入生がビツクリしちゃってるよ」

独特の負陰気を醸し出す御祓泡沫^{みぞぎうたかた}。

「そんな事はアリマセン！これはキミ達で言う所、固有^{デバイス}霊装ですからね。お題は破軍学園生徒会に付けておきマス。」

と言って紙袋医師は床を開けて去っていく。

「……ちよつと一輝達は今のが異常だと思わないわけ？」

未だに伸びる和真から一輝視線を移して尋ねるステラ。

「何ていうか慣れちゃったから」

と一輝。

「馴れって怖いよね〜」

と恋々。

「ファウスト先生がいるから安心してますよ？」
と刀華。

「会長、それはいかがな物かと」
と碎城が刀華にツツコミ。

「ま、新入生君も直ぐになれるよ」
と泡沫。

「何ていうか刺激的な人だね」
とエルフェルト。

ステラは思う。

絶対に慣れたくない!!と。

ゲスいWデートにはトラブルがつき物です

経験則で分かるのもどうかと思うのだが、和真は部屋で目が覚めた。

「大丈夫？生きてる？」

覗き込むエルフェルトは心配してくれたようで、多少申し訳なくなった。

「生きてるよ・・・一つ聞いていい？」

「何？」

「近くないですかね!？」

そう、一介の十八歳男子に我が侏ボディ少女の添い寝とか厳しすぎる。主に理性が。

いくら親公認とは言え、節度があると思う和真である。

「私は・・・和君なら良いんだよ？」

「あのな、そう言うのは・・・」

二段ベッドの下を利用する和真は、エルフェルトを引き剥がして言葉を失う。

「んっ！・・・元気そうで何よりです。和真君」

阿修羅すら凌駕する存在だ！とは誰の台詞だったか？とあるフラッグファイターも真っ

青な阿修羅が其処にいた。

「と、刀華さん？いらしてたの??」

「私の不始末と部屋を訪ねてみれば、なんしよるんんやか!？」

「いやっ！コレはああああ!!？」

和真はその日、二度目の『雷斬り』を目の当たりにした。

日曜日、学生にとっても社会人にとっても有意義に過ごしたい休日。一輝から買い物に行こうと誘われて和真とエルフェルトは校門

前に居た。

発案者は黒鉄珠雫、兄との親睦を深める為にショッピングに誘った所、ステラが二人つきりにすると危険だと自分も行くと言いだし、和真とエルフェルトに声をかけた。

部屋を訪れたら一閃の瞬間を目の当たりにして啞然としていたのは記憶に新しく、刀華が生徒会の仕事さえと悔しがっていたのは印象的だった。

「少し・・・遅いわね!」

と御洒落に決めたステラが言う。

出かけるに当たってステラもエルフェルトも制服ではなく普段着、当然なのだが・・・ステラはピンクを基調としたブラウスに黒いミニスカート、ハイヒールを履いてお嬢様感を出している。

対してエルフェルトもステラとは色違いの白基調のブラウスと紺のミニスカート、こちらは黒いブーツだ。

「ま、女の身支度は時間が掛るもんだ。ヴァーミリオンも分かってやれ」

「・・・そう言うアンタはコスプレ?」

「いや、昨日ぶった斬られてね?」

左目を眼帯で覆った和真にツツコミを入れるステラ。

一輝はまさに今時のメンズファッション、和真も左目の眼帯を除けば今時のメンズファッションだ。

「和真も大変だね?」

「おう、助けてくれ」

「ソレは無理かなあ?」

と申し訳なそうに一輝がおどけて言う。「ですよねー!」と和真。

「良いのお。青春じやのお」

脇でノブが羨ましそうにしているが無視しよう。

「・・・」

「?・・・どうしたの一輝」

「いや。ステラ、今日の格好似合ってるよ」

「くっッ!」

褒めてくれた一輝に、更に顔を赤くするステラ。

「こつちも出来取るようじゃし。ワシはイツちよサプライズを・・・」
「するなノブ」

一輝が急にステラを褒め、ステラが赤面するとノブは生暖かい視線を送りながら何かを画策する。それに間髪居れずに釘を刺す和真。

「和君、どうかかな？」

和真の前でひらりとゆっくり一回転してみせるエルフェルトにノブは察したのか「こつちもかのお」と眩く。

「ああ、似合ってるよ。」

「何じゃ?! 愛想無いのう!!」

驚く魔王、断じて口下手なわけじゃない。転生前でも友達といえば男ばかり、女子とシヨツピング? しかもだ、後々カップルとなる一輝とステラがいる・・・余計な原作知識はこれってWデートでは? と邪念を挟み、剣術ばかりに生きてきた男からすれば耐性の無さと相俟つてパニック一歩手前だ。

ぶつきら棒を装うのが精一杯なのである。

「あ、そう言う事か。お主もシャイじゃのお」

「よし、後で幻魔界に殴り込みしてやるからな? 覚えとけノブ!」
「?」

首を傾げるエルフェルト、目の前で裏拳を繰り出しつつ虚空に吐き捨てるなんてぶつちや毛変人か狂人に見えるだろう。

「エルフェルトさん、気にしたら負けだよ。和真の持病だから」

そんな光景に一輝はフォローを入れた。

「お兄様〜!」

「うわ!?! し、珠雫!?!」

「会いたかった、会いたかったですお兄様」

ゴスロリ衣装に身を包んだ珠雫が飛び込んできた。

どこぞのフラッグファイター、或いは砲弾にも見えるその行動はノブの坪に入ったらしい、中年特有の野太い笑い声が煩い。

「ちよつとシズクツ! 離れなさいよ!」

「変ですね?・・・何処からか声が・・・」

「私の存在を消すなアア！」

「またもやステラと珠雫が言い合いを始める。

恒例となった？言い合いを苦笑いを浮かべながら、エルフェルトが仲裁に入る中一人の青年が走って来た。

「もう、珠雫ったら早すぎよ」

「はっ？」

「誰？」

その口調に和真は思わず眩き、一輝とステラが首を傾げる。

少し声が高めの青年が息を切らしていた。そこまでは普通だ——だが。

「あらあら、そちらの二人が珠雫の言ってた黒鉄一輝クンと明智和真クンね」

「えと……君は？」

一輝が尋ねると青年はくるっと回り、再び二人に視線を合わせた。

「初めまして。珠雫のルームメイトの有栖院 凧よ。アリスって呼んでくれると嬉しいわ。ニッコニコニッコ！なんちゃって」

うん、特殊なのが来た。それもかくなり特殊だ、とある仮面戦士風に言っても控えめに聞こえると思うのは和真だけだろうか？

「そうなんだ！私はエルフェルト・ヴァレンタインって言うの。よろしくね、アリスちゃん！」

早速エルフェルトが打ち解け、仲良くなっている。他人と壁を作るよりは遥かにマシである。そういう点はエルフェルトに見習いたい所だ。

「三人とも何か言いたげだけど、私は体が男で精神は女よ？」

「何が違うんじゃ？オカマじゃろ要するに」

ノブの疑問は和真達三人共通する物だった。が、何時までも立ち話という訳でもなく、目的地に向けて一行は歩を進めていく。

ショッピングモールとは便利な物だ。大抵の物はそこに集合しているし、価格もお手頃な物が多い。

代表的なイオンやアウトレットショッピングモール等、あまりファッションや最新家電、調理器具に関心が無い和真も「ココに来れば大抵は揃う」と言う認識である。

(そう言えば、セールの度に阿古に荷物持ちさせられたな)

本日訪れたショッピングモールは生鮮食品と衣類が80%オフのセールが開催されていた。懐かしい記憶を思い出しつつ、一輝とステラ、アリスと珠雫に続く。

和真・エルフェルトペアと一輝・珠雫・アリス・ステラ組に別れ、買い物をする事になり、メインストリートを歩いていく。

「はあく……これじゃあイツキに近付けないわ」

「まあまあ。時間はたっぷりあるし諦めたらダメだよステラ！」

「そ、そうよね！エル、アタシ頑張るわ！」

「どうしたんだあの二人？」

「お買い物の話かな？」

最近、一輝に対する思いをエルフェルトに相談しているステラ、ステラにとって身近で恋を知る女子はエルフェルトなので当然といえば当然。だが、ステラはエルフェルトのように大胆なアクションは起せないなあと思いつつも一輝へのアプローチチャンスを狙っている。

ソレを知るエルフェルトは、今日と言うイベントでステラと供に想い人を撃ち抜く為に作戦を練っていた。

ソレを知る良しも無い男二人は、他愛の無い相槌を打って別れた。

和真とエルフェルトはファッシュンブースに入る。

「似合ってるかどうか見て欲しいんだけど良いかな？」

「ん？ああ、構わないけど……」

嬉しそうに陳列された衣類を見始めるエルフェルトとは対照的に、客の少なさと各ブースを繋ぐ業務員用通路の扉が半開きになっていることに和真は違和感を覚えた。

(店員が入っていつて閉め忘れた？つてさつきから店員も見えてないな……)

一年前、同じ様な状況を体験した事がある。解放軍と単身戦った時に体験したことだ。

(……紛争地域付近じゃあるまいし、思い過ごしなら良いが)

「どうしたの？怖い顔して……っ!!」

「え、エルフェルト？どうしたんだ!？」

辺りを見回している和真に尋ねるエルフェルト。次の瞬間、彼女は表情を強張らせて座り込んで震えだした。

「あ……ああ、アレ！」

エルフェルトが座り込んだことで、視線を合わせるために膝をついた和真も棚に隠れる形になった。

彼女が指差したのは、覆面の男たちがARを担ぎ出した瞬間である。

「エルフェルト、悪いっ！」

和真はエルフェルトを抱き抱えるとそのまま業務員通路に飛び込んだ。間髪居れずに野太い叫び声と銃声がショッピンングモールに響いた。

「動くんじゃない!!」

「おい、これ設計ミスだろ。何で各ブース直結じゃないんだよつ」

裏手に逃げ込んだことで和真と抱き抱えられ、子猫よろしく震えるエルフェルトは、先ほどのファッシュンブース会計裏で立ち往生を喰らった。

理由は台詞から推して知る事が出来る。和真は端から端まで直通

だと思っていたから飛び込んだが、コレでは袋のネズミだ。

「和君！理事長先生から・・・きやつ!?!」

電子生徒手帳を翳すエルフェルトは、扉を荒々しく開けるテロリスト達を見て言葉をつまらせる。一瞬、フワツと浮遊感に襲われたかと思ふと尻餅をついて痛みを感じた。

「ダイナミック入店ー!!」

「このがつ!?!」

和真が滑るようにテロリストの一人の頭を壁に強打し、意識を刈り取った。二人目のテロリストは、和真を見るや否や数歩後ずさり銃口を向ける。

「テメエは『鬼』 「取り合えず寝てようか?」 つ!?!」

撃たれる!とエルフェルトが目を瞑るより早く、縮地・・・剣術における高速の歩法で間合いを帳消しにした和真によつてテロリスト達は鎮圧されたのだ。

啞然とするエルフェルトを再び抱き抱えて、和真は言う。

「今の内に移動しようか、直ぐにココはばれるだろうから。」

レジ裏に出ると、

「あら、どうやら無事だったみたいね」

「二人共大丈夫!?!」

アリスと一輝がいた。

Wデート÷解放軍×学生騎士Ⅱ後は分かるな？

所変わり、破軍学園理事長室。

解放軍ショッピングモール占拠の一報を受けた黒乃が取った行動は、先ず学園で唯一単

独殲滅を行った経験を持つ者へ念押しをすることだった。

「繋がった。ヴァレンタイン、状況はどうだ？」

そして、数秒後に遅かったと思うことになる。

ショッピングモール・裏通路

「黒鉄君達と合流しました。テロリストは……はい、和君が瞬殺して」

『……明智、固有霊装は使ったか？』

「何言ってるんですか理事長、コレですよ」

電子生徒手帳に翳して見せたのは腕である。力瘤あたりをパシパシと叩く和真。

『流石だな、明智。その状況を打破できるか？』

「無理です。人質が多すぎる、銃事態は怖くありませんが敵の人数も分からない以上下手に動けません。理事長、分かる限りで良いんで情報をください。」

「ねえ、一輝。何で理事長は和真に任せるような言い回しなのかしら？」

アリスの疑問は最もだ、固有霊装デバイスの使用許可を与えて現時点で居るメンバーでかかれ、ないしは逃げろと言うだろう。が、黒乃の言うことは逆。

「和真は実績があるからね。」

「……『最弱さいじやくのF』は伊達じゃないのね」

「アリス、止めてくれ。」

聞こえていたらしい、アリスを制する和真をアリスはクスクスと笑いながら承諾した。

『今、報道されている限りでは20人〜30人前後の解放軍だ。今しがた能力使用許可は出した。人質はフードコートに集めているらしい。』

黒乃の情報を元に考える和真。

「よし、理事長。やってみますが期待はしないでください・・・」

『分かっているとは思いますが、一般市民の安全が最優先だ。手は回しておくから健闘を祈る』

通話を終えて電子生徒手帳をポケットに仕舞うエルフェルト。

「和君、どうするの?」

「エルフェルト、正直に言ってくれ。撃てるか?」

エルフェルトが和真と同室になった経緯を知る一輝は驚いて目を見開いた。

戦えというのか?彼女にも?

「和真、ソレは」

「大丈夫、私も・・・戦えるよ」

和真を除いた一輝達は、二階・フードコートを一望できる場所までアリスの固有霊装『黒の隠者』の能力を使い、移動していた。

「まさかとは思うけれど、和真ちゃん・・・」

「うん、アリスの考える通りかも知れない。」

アリスは、和真が正面突破を試みると考えて一輝はソレに同意する。

「違うよ、二人共・・・」

エルフェルトが自身の固有霊装『<rb>血塗られた贈物</rb>

>< r p > (< / r p > < r t > ブラッティギ

ト < / r t > < r p > (< / r p > < / r b y > 『を展開し、二

丁の銃を連結・・・狙撃形態にして狙いを定めた。

フードコートで、人質を見張る解放軍はリーダー格の伐刀者ブレイザーを込み
8人が視認出来る。

「和君はきつとやり遂げるよ、私達はチャンスを待つ・・・」

震える手を押さえながら、固有靈装デバイスを抱えて自分に言い聞かせるに
言うエルフェルトに二人は息を飲んだ。

そんな三人の目の前で、ステラが行動を起した。

人質を守ろうとステラが立ち向かっていくも、解放軍の伐刀者・ビ
シヨウにより攻撃全てを跳ね返され、人質の中にいる子供の身柄の安
全を条件にステラに服を脱ぐよう指示していた。

三人が、否。特に一輝が殺気立つ。

エルフェルトもステラがどういう気持ちで衣服を選んだか知って
いる。好意を寄せる人に見てもらいたくて・・・相談してきた友の気
持ちを知っている分、一輝ほどではないが怒りを覚えた。

「でも、黒鉄くん。今は飛び出さないで！」

トラウマの恐怖に駆られているとは思えないほど冷静にエルフェ
ルトは殺気立つ一輝へ告げる。

「ステラは・・・あの学園で・・・初めて出来た友達なんだ・・・
なのに・・・ス

テラが、ステラがあんな姿で泣いているのをずっと見ていろっつい
うの？」

スコープごしに覗いていたエルフェルトでも見えたか見えないか、
それほど僅かな変化を一輝は見逃していない。それでもエルフェル
トは電子生徒手帳を一輝に見せる。

結果が出来るまで待つて欲しい。 珠雫

そんなメッセージが表示されていた。

「結界？！だけどそんな魔力の気配は・・・」

「そりゃそうよ。なんてたって珠雫はBクラス騎士だけど、敵に気付
かれないように魔力を用いる迷彩の技術の指標。魔力制御だけはス

テラちゃんを抜いて今年度ナンバー1よ」

「それに和君も動いているんだよ？大丈夫」

「信頼しているのね。彼の事を」

「勿論、私の英雄だもん」

「おい！誰が撃って良いつつた!?!」

空気を揺らす銃声にビショウが激を飛ばした。当然ながら人質を見張るビショウ込み八人の解放軍は一斉に銃声の発生源である生鮮食品売り場へ視線を向ける。

「び、ビショウさん！“奴”だつ・・・“奴”がココにいたんだ!!」
命からがら逃げてきた様子の解放軍メンバーの一人は必死にビショウへ訴える。

殆ど合図だった、解放軍が駆け込んでビショウに訴えると同時にビショウの背後から裂帛の一声が上がる。

「障波水蓮!!」

珠雫が障壁魔術を発動、同時に見張っていた解放軍は頭上からの狙撃を受ける事になった。

「なあ、リーダーさんよ。迂闊じゃね?」

背後から一突き、声が聞こえ飛び退く間も無く“左脚”を貫かれたビショウは尻餅をついた。

「お・・・お前は“鬼”!?!」

「幾ら魔法が通用しない・・・伐刀絶技ノイブルアーツも魔力頼りの物が多いしな。箱入り娘には有効だろうよ。あ、そこ解放軍。撃ちたきや撃てよ」

突撃銃の銃口を向け、震える解放軍に撃てという和真。勿論傷を負うことは無い確信か

ら来る台詞で、銃弾の軌道は目に見える。

「ふざけるなあああ!!」

恐怖をかき消すような咆哮を上げ、解放軍が引き金を引くと同時に一輝達が飛び降りた。

ガガガガガッ!

一刀修羅を発動した一輝が着地し、和真の背後でビシヨウの両腕を削ぐと同時に雷電を構えた和真がつまらなそうに口を開いた。

「もう終わりか?」

「ひっ・・・がう!」

逃げ出そうと踵を返す解放軍の脳天を容赦なくカチ割る和真。

「あ”あ”あ”アアアアアアア!!痛い!痛い痛い・・・ヒイ!」

「うるさいな」

痛さにより声を上げるビシヨウに陰鉄の刃を向ける。

「そんなものiPS再生槽使えば治るだろ。お前がステラにやった事に比べれば大した事ない」

目付きを鋭くして、ビシヨウにひたすら殺気を飛ばす一輝。陰鉄を仕舞いステラに駆け寄る。

「ステラッ!」

「い、イツキ!」

力強く抱き締める。全身を優しく包み込むように一輝はステラを抱き締める。

「ごめんね。もっと早く助けたかったんだ・・・遅くなってごめん・・・」
「ううん。気にしないで・・・イツキが来てくれた・・・それだけで嬉しいから」

「ふう・・・俺邪魔じゃね?」

一輝とステラを見て、和真は一息つくと呟く。実に初々しいやり取りが一輝とステラ間で行われている中、アリスの存在を確認できこそすればエルフェルトは何処だろうか？

「かゝずくくくん!!」

「……アホかあ!？」

絶賛身を投げた瞬間だった、それも和真を目掛けて全力で踏み出して。

一階二階程度の高低差で五メートル弱飛べるか？と言われたら無理と答える。誰でもそうだろう。助走つけければ話は変わるかもだが、素の状態で飛んでだ、無理に決まっている。

和真は雷電を霧散させるや直ぐに受け止めに走る。そんな光景を柱の影から覗く頭蓋骨のお化けが居た。

「殿の申されるとおり、もう結婚しちやえば良いんじゃないでしょうかね?アレ」

足軽……最下級幻魔ながら個の意思を持った個体、故・鳶介というのが人であった時の名前だ。

幻魔界でのんびりしていた所、ノブから「ちよい不味そうじゃから助っ人よろ!」と呼ばれたのだ。

ファウスト先生の移転扉で現場入り、するとあら不思議!もう決着ついている。

鳶介は直ぐに幻魔界に帰る事になった。

唯一の収穫は今代・鬼武者は鳶介の知る限り最も女難だと言う事だ。

騒ぎが静まった時——一人の青年が姿を現す。

「いやー、誰かと思ったら君達だったのか。久しぶりだね二人とも」

「……ツ!」

「やあ」

こちらに手を振るのは一輝にとっては絶対に会いたくない人物だった。

「あ、桐原じゃん。居たのか?」

和真にとってはその限りじゃない相手、桐原静矢——そして彼は

ニヤリと笑う。

「黒鉄君に明智君……君ら、まだいたんだ？Fランクの分際で」

「……ッ!!」

見下した態度にエルフェルト、ステラ、珠雫は静矢の方に睨みの視線を送る。

「てつきり僕の助けがいるかと思っただけど必要なかったみたいだね。まあそりやそうか。なんていっても僕は強いし、こんな奴等が相手じゃ話にもならないね。精々Fランクである君達の方がお似合いかな?」

「なんなのよアイツ。ムカつくわね……消し炭にしてやろうかしら」
「許せない……」

「お二人に同意見です」

「ドウドウ、ヒロインズ。で、小ばかにするだけなら後にしてくれるか?」

押し黙る一輝、怒りに燃えるステラ、珠雫、エルフェルトを宥めつつ和真は言い放った。

「キミは黙らないのかい?僕にボロ負けしてクセにつ」

「いや、一矢も食らってないからね?単なる時間切れタイムアップの判定勝ちだろ?」

「ふんっ!女子の前だからって見栄を張っているのかい?だとしたら見苦しいだけだ、恥をかくのはキミだよ、明智君」

「ソレ貴方だよ。」

桐原に油を注いだのはエルフェルト。

「ほう?僕が落ちこぼれのFランクに負けるだって?」

「いや、エルフェルトは其処まで言っただけで「そう、貴方は勝てない」お願い黙って!」

のらりくらりと流そうとしていた和真は必死に桐原を立ててお引取り願う姿勢を崩さない。

だって面倒なんだもん、プライドだけ高いイケメンって。

去年の選抜メンバーって言ったって能力選抜式だったから実際の戦闘力じゃないし、一輝に対してだって無防備の相手に固有デバイス霊装を

使って攻撃してただけだ。

元の世界なら単なる犯罪行為でしかない。

「其処まで言うなら、僕がコイツを負かしたらキミは僕のガールフレンドだ!!」

アレ？可笑しいな、この台詞はステラが一輝をバカにされたことに腹を立てて桐原と口

論の末に吐かれる物の筈だ。それが、ステラではなくエルフェルトに言われている。

「良いよ、もし貴方が勝てば私を好きにすると良いよ。」

エルフェルトの口から飛んでもない台詞が飛び出た。

友が齎す修羅場

何であんなことを言ったのかエルフェルトに問い詰めた所、「バカにされた」ことが我慢ならなかったらしい。

うん、其処は非情に有り難いがエルフェルトが思っているほど自分は「他が為」に剣を震える人間ではないと思っっている和真である。

「成る程、選抜予選の相手・・・辰巳かい」

「知り合い?」

電子生徒手帳に通知が来たので見てみると現在三年の友人の名前が表示されていた。

岡倉辰巳、黒髪をリーゼントにした一昔前の番長みたいなキャラだ。

彼の固有^{デバイス}霊装も些か特殊で槍と鎧のセット。

間合いの読み合いだけなら辰巳が有利、ぶっちゃけ刀の間合いに持っっていくまでに突かれて終いだ。

「でも、まあ勝てないわけじゃないんだよなあ・・・」

「おう、和真! お前の好きそうな本手に入った・・・ぜ・・・?」

対戦相手が、紙袋片手に飛び込んできたときってどんな対処法があるだろうか?そこはほら、十八歳男子同士の極秘データのやり取りはあるわけですよ。でもね!?選抜戦の対戦相手に決まった以上、気軽に来るのはどうかと思うんだ。

「何ですか!いきなり・・・何ですコレ?」

「和真ア!何でお前の部屋に女子が居るんだアア!!」

「待てエルフェルト!ソレは見ちゃならん!!と言うか血涙流す前にチャイムならせええ!!!」

和真の胸倉を掴んで血涙を流す辰巳が手にしていた紙袋は放り投げられて、エルフェルトの手に納まった。

ガサガサとあけるエルフェルトを制止するが、彼女は止まらない。

うん、エルフェルトって変なところで強情と言うか頑固と言うか・・・そうじゃなくて!

「好きそうな本って言ってたよね?どんな・・・」

袋から出したエルフェルトが凍りつく。そして震える。
分かるとも、経験則で。

「きゃあああつ!!」

「バカガード!」

「なにういをう!?!」

岡倉辰巳、男としてリタイア。

「んふふ♪」

エルフェルトはご機嫌だった。と言うのも事故だったが和真の好みのタイプを知ることが出来たからである。

対して和真は、

「……あ? 選抜予選、岡倉が相手だよ」

死んでいた。詳しく言うならお通夜の会場に流れる静けさを全身からかもし出していた。

「ねえ、一輝」

「何? ステラ」

「昨日の悲鳴ってエルだと思っただけで和真に聞いても語ろうとしないのよ」

「あく……それは触れないで置いてあげた方がいいんじゃないかな?」

首を傾げるステラに、何かを悟った一輝。

以前は刀華がその現場に出くわし、雷斬りで見事に切り払った後に和真は酷いお灸をすえられていたような……。一輝も開いていた玄関から見たただけなので詳しく知る物ではないが持ち込んだ本人、件の三年も酷い目にあつたようだ。

「岡倉……ああ、熱血槍使いの岡倉辰巳先輩ですか!?!」

日下部加々美が、メモ帳を捲って驚いた。

「強敵なの？」

加々美に興味本位からステラが尋ねる。

「学園序列五位でBランク、鎧が誇る防御力と卓越した槍術は現七星剣王に並ぶとも言われている伐刀者ブレイザーですよ！明智先輩も破格ですが強敵に当たりましたね!？」

興奮収まらぬと言う感じで解説してくれた加々美にステラは相槌を打って四つ目の購買弁当を開ける。

「因みに購買と食堂が破軍学園には存在し、寮に戻れば簡単な調理くらいは出来る台所がある。流石にスーパーのように生野菜は購買においてないので外に買いに出るしかないのだが。」

「私はエントリーしなかったけどステラはしたんだよね？相手は誰なの？」

「無名の先輩よ。と言うかエル、昨日何があったの？」

「だああ！一輝、そーいやお前の相手は」

「うん、桐原くんだよ」

ステラが「どうしたのよいきなり!？」と抗議する中、一輝は静かに答えた。

「桐原かあ・・・アイツは自分を不可視化インビジブルさせる伐刀絶技持ちだ。」

近接戦主体の俺や一輝とは相性が悪い。捕捉する術を持っているなら何とでもなるだろうが開幕速攻はセオリーだな」

「おお！分析能力も高いんですね？」

「普通だろ？」

「イチヤくんじゃねえ!!」

砲弾が飛んできた。リーゼントヘッドと言う砲弾が。

中庭の一角を陣取って昼食を取っていた一年一組メンバーは、三年では知らぬものは居ない「リーゼント砲」を目の当たりにして唾然とする。

特に加々美にいたっては何処から一丸レンズカメラなんて取り出したのか分からない。

「煩いっ！いきなり頭突きとか止めろっ猪かお前は!？」

「東堂生徒会長だけじゃ飽き足らず同学年女子にも手を出すのかお前は!?!」

「飽き足らず?」

一瞬でエルフェルトの目からハイライトが消えた。加々美は嬉々としてメモ帳を取り出してメモを始めている。いかん、このままでは俺の人間性が疑われる!

「しかも全員ソコソコ胸がありますと!?!と言う事だ!!答えろつ!!!」

また血涙を流す辰巳。一輝はその光景を見て「あ、騒動の原因ってこの先輩か」と納得する。ステラは女性差別的な発現に表情が厳しい物だ。

「黙れ!お前の性癖に付き合うほど今の俺は暇じゃない!!」

「ほう!?!ならばヴァレンタインだっけ?相部屋女子にお前のせいへっ!?!」

「和君、少し話そう?」

目が怖い、本当に。

ステラと一輝、加々美も一瞬身を震わせると言葉を失った。何せ固有^{デバイス}霊装で辰巳の顎を一撃、意識を刈り取ったのだ。ピタリと首に添えられた『血塗^{ブラッティ}られた贈物^{ギフト}』が本気であることを示す。

加々美は「アレ?ヴァレンタインさんも選抜戦出れば良いセン行つたんじゃ?」と首を

捻るほどの鋭さを持っていた。

「あ、連絡ありがとうございます。エルフェルトさん」

「ちよつと待て!何で刀華さんがいらつしやるの!?!」

「それはエルフェルトさんから連絡を頂いたからですよ。何でも変な先輩に絡まれて貴方の刺激的な私物が見つかったとか?」

「……実は仲良いだろキミら!?!」

その日、そのやり取りを見たのが和真を見た最後となった。

選抜戦当日、一輝の試合の後に和真の試合は控えている。

単純に言おう、原作と大差なく一輝が勝利した。否、大きな差は幻魔界を経験した一輝が初動のミスから受けた傷こそアレ、原作ほど痛めつけられず桐原を下したのだ。

ステラの激昂もあってだが、一輝は左肩と右太股に一矢ずつ貫っただけで勝利した。

うん、可笑的い。

原作より一輝が強くなってる。

「うし、行くか。」

選手控え室で、和真は一人呟いて立ち上がった。

鎧と武者

『さあ、本日の第二試合！鬼武者正規試合に初登場です。会場内は既に満席ツやはり注目度は高いかあ!!』

実況のナレーションが会場に響する。

その言葉の通り、会場は見渡す限りの群衆によって隙間を塗り潰されていた。その大半は制服に身を包んだ生徒であるものの、その中には時折学園の教員と思われる者が混ざり込んでいる。どうやら次の試合の対戦カードを気にしているのは生徒ばかりでなく、彼らもこの試合に興味津々なようだ。

ソレもそのはず、入学して二年間オフィシャル正規試合には一切顔を見せない兵が白昼堂々、剣を交える。

公式試合には顔を出していない、非正規戦で名を馳せ、彼の通り名となった「鬼武者」が来た。

『この試合から会場にいらっしやった方々のために改めて紹介を！
実況は放送部の磯貝、解説は西京寧音先生が担当しております！西京先生、いよいよこの日が来てしまいました。現在KOKで三位という実績を持ち、東洋太平洋圏最強の騎士として名高い先生はこの試合の行く末をどう睨んでいらっしやるのでしょうか?』

実況の言葉に応えるのは、少女と見紛うばかりに小柄な女性だった。

派手な和装を緩く着込んだ西京と呼ばれるこの女性。普段から教員の一人として試合の解説を任されることはあるが、その仕事ぶりは決して真面目とは言い難いものだった。気紛れに解説に遅刻し、途中で抜け出し、時には実況に任せて姿を現さない。良く言えば豪放磊落、悪く言えば適当な性格をしている人物だ。

先ほどの一輝の試合も真面目に解説することはない。

一輝が完全パフォーマンス掌握を開眼して初めて解説らしい事をして見せた。

『明智坊の戦い方は黒坊と同じさ。剣術オンリー……違いは因果干渉系スキルを持ち合わせるってことさね……後はFランクとは思えないノーブアルアーツ伐刀絶技の多様性。ふざけているにも程がある。殺し殺されの

世界にいた奴がなんで出てくるかなあ?』

酷い言われようだが、実際の射ている。

学生騎士は所詮アマチュア。アマチュアの試合にプロを投げ込んでみよう、結果は見えている。そんな出来レースを見て何が面白いのだろうか・・・と言う所だ。

それに和真から言わせれば因果干渉系スキルではないと断言しよう。

戦国に生きた名高き武将達は皆持ち合わせた力なのだ。

伐刀絶技に関しては何とかが鬼の宝刀が宿す業、つまる所は自分の力じゃないんだよなコレ。

戦術殻と言う鬼の秘術、固有^{デバ}霊装^{イイス}を介して出す魔術と言う点では伐刀絶技と同じ。伐刀者^{ブレイザー}達にはそう認識されても不思議じゃない。

「んなもん七星剣王に興味あるからに決まってるでしょうが」

西京の台詞に反発するように、和真は一人走ってゲートを潜った。

『おおっと！青コーナーから堂々の登場っ！遅れてきたオールドルーキー！二年の留年は伊達じゃない！裏も知り尽くした鬼武者！一年！明智和真登場です!!』

「悪意あるだろ！実況!!」

思わず実況席に向けて叫んでしまう。誰も好き好んで二度の留年するか。

観客席からは興味心身と全員が視線を注ぐ。

茶髪をポニーテールと言うには短い、古く言えば丁髷のように後頭部に結わいたヘアースタイル。整った顔立ちに無駄のないがっしりとした筋肉質の体、一見すればソレは十八歳男子なら運動するタイプに居そうな印象である。

学生騎士なら、否。学生騎士でなくとも知らないわけがない、この二年間「鬼武者」の異名が何処で轟いていたか。

「この時が来ましたね」

観客席で、刀華達生徒会メンバーは固唾を飲んで見守る。

「うむ、岡倉先輩の無事を祈ろう」

辰巳の言葉に和真は静かに耳を傾ける。辰巳の言う通り、二年前は確かにタイミングが、模擬戦の前だった。

「俺は戦いたかったんだぜ！」

「そうか、ならば死合おう。お互いに交わす言葉はないだろう」

和真も友人としてではなく、一剣士として目の前の戦士と剣を交えたいと思う。

だから、言の葉ではない。

「来いッ！インクルシオオオオ!!」

「起きろ、雷電！」

『両選手一触即発！ それではこれより試合を開始したいと思います
！ 皆さんご唱和くださいッ。』

——Let's Go Aheadッツ!!』

最初に動いたのは和真である。

紫電を走らせ、辰巳をすれ違い様に斬り捨てる。しかし、辰巳は倒れる事無く手にした槍『スラッシュハイド』を横薙ぎに振り抜いて和真をなぎ払う。

それを振り向く事無く、異形の日本刀『雷電』で受け止める和真。間髪居れずに槍の穂を掴むと切り返しに柄頭を辰巳の喉仏を突く。

ガキイン！

そして、両者の間合いは再び開く。

「硬ッ・・・」

「ああん？俺の防御舐めんじゃねえ！今年の俺は文字通り鋼鉄並みの強度を誇るアイオンマンよ!!」

軽口を叩きつつも辰巳の鋭い突きが迫る。穂先を見切ることには難しいと殆どの生徒は思い、教職員もあの連続突^{ラッ}突^{シュ}きを剣術だけで破るのは至難の業と考える。

「・・・惜しいですね」

刀華が呟いた。刹那、穂先を斬りおとした和真が切上げから勢いを殺す事無く斬り下ろ

しに転じ、槍の穂先を失って一瞬呆けた辰巳を蹴り飛ばした。

『おおつとー！何と言うハイレベルな攻防でしようか!?まさは一瞬！槍と刀が交わった瞬間に岡倉選手の固有霊装デバイスが破壊されました!!』
固有霊装デバイスの破損、それは一度霧散させて再構築すれば意味はない。

実物の武器のように一度破壊すれば二度と使用不能、機能の一部を制限させるなんてことは無いのだ。

再構築の隙を与えまいと和真は何度も太刀を浴びせるが、辰巳の鎧の前に火花を散らすだけで決定打にはならない。

(使うか、『羅刹迅雷』・・・)

一輝が『一刀修羅』と言う全てを賭けて生み出したノーブルアーツ刀絶技があるように、和真も多数戦・圧倒的な実力差を覆すブースト系ノーブルアーツ刀絶技を会得している。

簡単に言えば『一刀修羅』が人体限界を無視した時間制限付きのドーピングとすれば『羅刹迅雷』は、術者が崩壊するまで解除されることは無い。

「ウラァー！」

決定打にならない太刀を浴びながら辰巳は槍を再構築、再び槍と刀の攻防が始まる。間合いは槍にとって不利だが、辰巳は槍を巧みに使って和真を翻弄した。

槍との戦闘なんて幻魔界と言う常時戦場の世界を経験した和真が戦闘経験が無いとは言わない。こと魔力開放によるブーストなんて幻魔界には存在しないのだ。

岡倉辰巳は、戦国の世に名をとどろかせた槍使いと同レベル・・・魔術によるブーストがある分優位かもしれない。

槍の扱いは達人レベルであるという事、そんな達人の槍術を持ってしてもカズマを捕らえることは出来ていない。

「まるで見えているように避けているけれど、明智さんの能力は因果干渉系なの？」

珠雫が推測を口に出した。

和真の動きは必要最小限で槍を避け、刃で反らし、反撃の隙を作り出して剣を振るっている。それはまるで「ココを攻撃する」或いは「この軌道を槍が通る」様に知っている動きだ。

「でも、そんな能力聞いたことない。仮に攻撃が何処を通るか知ることが出来る能力だとしてもあんな正確に対処できる物かしら？」

アリスが異論を唱えた。

因果干渉系能力と言う事事態がレアだが、毎回のように能力が発動して攻撃を避けているというならソレだけでもかなり負担を強いているのではないか？

「『導殺眼』・・・また磨きが掛りましたね」

その二人の疑問を直ぐ近くで観戦していた刀華の呟きによって解決することになった。

「生徒会長さん、『導殺眼』って？」

アリスが尋ねると刀華は解説を始めた。

「一言で言うなら、和真くんには視えているんですよ。詳しくは和真くんから聞いてもらったほうが良いと思います。私も彼から聞いたのですが今一原理は分かっていますから。」

そう含みのある言い方で刀華が話す。珠雫とアリス、二人から見ても和真は予め攻撃が通る場所を予測していたかのように動いている。

達人ともなれば、攻撃の予測は容易い物だ。が、槍がどの位の速度でこの場所を通るな

んて予測は出来ない、出来るはずが無い。

あくまでも大雑把に脚を狙ってくるとか、腕狙い、視界を奪うつもりか？なんて位だろう。

「大体分かった・・・」

連続突^{ラッ}突^{シュ}きは連続突^{ラッ}突^{シュ}きによって返される。

寸分の狂いもなく、刃の先と鏃の先がぶつかり合い、激鉄音を奏でた。

『おおっと！明智選手、『突きを突きで迎撃』していく!?そこに一切の狂いありません!!西京先生、アレは一体!?!』

実況も、いや、会場全体が絶技に言葉を失った。ある者は解説を求め、ある者は達人の呆れて笑うしかなかった。

『単純な話さ、槍の軌道と速度を見切った。本気になれば明智坊なら捌ききれると言ってるんだ』

西京も関心こそするが、真つ向から相手の技を潰しに掛る和真に呆れ半分と言った様子。

『解せないのがその観察眼さね。試合開始以来、アイツに攻撃は掠つてもいない上に短時間で辰坊の動きを読みきった上で動きをかぶせるなんて私でも無理な話さ。どんな修羅場を潜ったのかねえ』
『明智坊の動きに興味こそあれど、その結果は呆れるほかないと西京は締めくくる。』

防御力で優勢を維持していた辰巳が徐々に推され始めていた。

刀対槍、そのリーチの違いに苦しめられるかもと聞いていたエルフェルトからすると改めて和真の力量を思い知らされる。

「苦戦なんてしてないじゃん……」

呆れるほどに、遠くにいる。改めて実感したエルフェルト。

近くに居たいから、そう思ってた。が、それだけでは足りない気がしていた。

「大した物よ。魔術面で劣るとは言え、鉄の如き南蛮鎧纏い立ち回るとは……」

誰に聞かれるでもなく、ただ感心してノブが呟いた。

こと剣術・槍術で優劣をつけるのは難しいとノブも感じている。戦国乱世を生きた名高い魔王も辰巳の力量を高く評価し、和真が攻めあぐねたという点だけでも現状の幻魔勢に勧誘したいほどである。

だって、鬼武者を打倒できるかもしれないし。

「それでもあの若造は終いよ。」

決着は近い、何かそう感じるノブは腕を組んで和真の攻勢を眺める。

『おおっとー紫電一閃!!岡倉選手、電気を浴びたように硬直している!!コレは一体どうしたと言うのか!!』

実況が、太刀を受けるたびにビクッ!と電気を浴びたように硬直を

繰り返す辰巳の状況

を代弁した。

「決まりですね。」

観客席でも刀華が呟く。

「固有^{デバ}霊装^{イス}を打ち込む度に高圧電流を流す……明智さんの能力は電流操作系なのかしら？」

「それだけではないわね、あの見切りといい……一輝が慕うだけあるわ」

珠雫の見解を聞きながら含みのある言い方で纏めるアリス。ほぼ同時に、舞台上で岡倉辰

巳は大の字に倒れ、固有^{デバ}霊装^{イス}が霧散した。

『けっ、決着ー!?!どうしたと言うのか岡倉選手気を失っております!!』
その一言が、この選抜戦の終わりを知らせた。

実家ですよ！

七星剣武祭選抜戦を一輝とステラ、和真は順調に勝ち進んでいた。一輝の株は上がりファンも出来始めている中、一輝は剣術一本の戦い方を変えず、今日も選抜戦を制し、ステラは相手が上級生だろうが同級生だろうが持ち前のバ火力で蹴散らしている。

和真はというと、平常運転で、

『決まったアアア！またもや一閃の下、相手を血の海に沈めたアア!!』
と実況が言うように一太刀で相手を切り伏せたのである。

本戦と同様に実像形態を使用する選抜戦、飛び道具なら当然当たれば出血する。

そんな血生臭い光景を破軍学園関係者ではない、中年の男性が見ていた。

「おお、今年は出ると聞いていたが圧勝じゃないか」

彼の名はジャック・ファクター。

鬼武者の経験を持つ、現フランス軍伐刀者犯罪対策部隊総官が、双眼鏡を片手に観戦していた。

選抜戦で三日にいったぺんのペースで試合が消化されている今、和真とエルフェルト、刀華と一輝、ステラは応接室でジャックと対面している。

「和真、知り合い？」

「ジャック・ファクター。現フランス軍の対伐拔者対策部隊のトップ、一昨年からガチの戦場に俺を引きずりまわした張本人だ。」

「ハハハッ！そう言うな、順調に勝っているみたいじゃないか。」

尋ねる一輝に不満全開で答えるとジャックは笑い飛ばした。

「ジャックさん、お久しぶりです。」

「おお、バレンタインご息女もお元気そうで何より。今は奔走してい

らっしやるようですか？」

「ええ、その節はどうも協力していただいて感謝しています。」

「え？は？どう言うことよ、エル」

親しげに挨拶をするエルフェルトと何か含みのある発言をかますジャック、疑問を持ったステラがエルフェルトに尋ねると、

「二年前に和君の事を教えてくれたの」

思わず和真は頭を抱えた。

つまり、和真は供にテロリストと戦った歳の離れた友が良かれと教えたとする事になる。事実、二年前の事件後直ぐに「出会いがあると良いな」などと言うメールを寄越したのはジャックだ。

「ジャック、確信犯だったな？確信犯だな!？」

「まったく、ご息女がココまで慕ってくれているんだぞ？答えて魅せるのが男「ん

んっ!」・・・そう言うことか。大変だな？」

ジャックが決まって「女に應えるのが男」と言おうとした所、無駄に大きな咳払いをし

て見せた刀華にジャックは何か察したらしい。

「世間話をしにきたわけではないと思うのですが、本題は？」

と刀華が切り出した。

ジャックも職務上、そんなに暇なわけでもない。尋ねてきたのにも理由がある筈だ。

「率直に言うぞ、和真。実家まで保護した要人を送り届けて欲しい」

「・・・爺さんに話は？」

「通してある。それにお前が居れば警備に襲われる事もないだろう？」

「ちよつと待ってください。和真の実家の警備に襲われるとは一体どういう意味ですか？」

ジャックの言葉に異を唱えたのは一輝だ。

警備に襲われる、不審者なら兎も角訪ねてきた客人を襲う警備は警備とは言わないのではないだろうか？

「あく、一輝は家に来たことなかったな・・・刀華はあつたつけ？」

「ありますよ、忘れもしません・・・あんなお化けが居るなんて」

「和真の家はお化け屋敷なの!?!」

「断然行きたい!和君、良いよね!?!」

可笑しい、血の気が失せる刀華とは対照的に興味津々と言う感じのステラとエルフェルト。

「分かった、エルフェルトとの件も含めて爺さんには聞きたいこともあるからな」

比叡青空の家。

児童擁護施設と言うには些か特殊で、幻魔が夜な夜な警備を行っているからである。

人里離れていると言う事もあり、委託するにも金銭面で断念せざる終えず、近年の児童養護施設とは些か時代遅れと言うのが本音である。

「随分と山奥なのね・・・」

ステラの言う通り、三十分一本と言う古びたバスを使って山道を揺られること一時

間。木造の廃校を買い取って開校した孤児院が比叡青空の家だ。

そして、何よりここに居る児童は些か特殊な経歴を持っている。

「へえ、随分と自然豊かな・・・」

言いかけたところで、一輝は、沢の対面に居る落ち武者と目が合った。

うん、典型的な落ち武者。

笠を被り、笠から覗く顔は髑髏のソレ。身体は白骨で戦国時代でいう足軽スタイルの白骨お化け。

「・・・一輝、まだ日中よね？」

「そうだね、ステラ。まだ午前十時過ぎだよ」

気がついたステラが確認するように尋ねると一輝は時計を確認して答えた。

エルフェルトが和真にしがみ付いていた。

「鳶さん、アンタ人目につくなよ！」

「は!？」

和真の一声に、一輝とステラがハモった。

比叡青空の家、現在は鬼の縁者と幻魔が共同で切り盛りする訳あり孤児院である。

「爺さん、帰った。」

和真が出迎えた白髪の麗人に一輝は目を疑った。

天海はどう見ても爺さんと言うより青年なのだ。そして、武人としての気迫は凄まじい、今まで一輝が出会った騎士達でも常に気を張り詰めた者は居ない。

「ああ、和真。お帰り・・・そしていらっしやい。エルフェルト様、ステラ様」

天海が深々と頭を下げ、一輝は改めてステラってお姫様だったと思い出す。

(そう言えば、国賓なんだよね。二人は)

最近はどうも、恋仲になれど気軽なルームメイトと言う感じがぬぐえていなかった。

「様は止めてください、天海様！未来の義父なわけんですから」

「エルフェルトさん!？」

エルフェルトのぶっ飛び発言に肝を冷やす和真、何せ鳶介に驚いている刀華も居るのだ。

感電死はしたくない。

「いらつしやい、キミが黒鉄一輝君だね？」

と天海が言う和一輝は会釈した。

正直、一輝がくじけずに信念を貫ける切欠を作ってくれた祖父に天海の雰囲気は似ていた。そして、剣の腕は途方もない高みにいると言う事も感じられる。

何と言うか、達人と相対したときの圧倒される感覚だ。

「はい、お邪魔します」

「畏まることはない、成る程・・・和真は良い好敵手に恵まれたようだ」
「おい、爺さん。面倒かかつ込むのは良い・・・ああ、そう言う餓鬼を今までも迎えてきたからな。ソレよりもだ！」

「か、和君！うし、後ろ!!」

しがみ付き、揺すりながら訴えるエルフェルト。

「あり？こんな所で立ち話ですか？」

さっすきの足軽が居た。

「何じゃ、鳶の奴見つかつたのか？」

けらけらと笑いながら、漆黒の鎧を纏う時代錯誤の武人が姿を現す。

比叡青空の家敷地内限定で、かつて魔王とまで恐れられた当主が肉体得て闊歩する。

「何してんだノブ!？」

「は!？」

エルフェルト、一輝が信長の登場にハモった。

所変わり、座敷に魔改造された元教室で和真は嘆息し、エルフェルトは茶を運んでくる鳶介に最初こそ驚いたが興味を引かれ、刀華は相変らず慣れないと出来るだけ鳶介を視界に入れないようにしている。

「信長、出て来るなといったらう!？」

「良いじやろ？和真の嫁さびギヤ!？」

「黙れ、変態魔王崩れが」

例えば、織田信長本人が現れたとしよう。

戦国の世で言えば超有名人が固有^{デバイス}霊装で小突れる光景についている現代人が居るだろうか？

一輝は少なくとも居ないと思う。

ステラは、先ずコスプレだと疑ったし、居るはずがないと断言するだろう。

刀華は、言わずもがな幽霊を見たとき青ざめる。現に今も青ざめている。

「成る程、戦国の世ではお盛んだったんですね!？」

ズレていた。

「……本題だ。ジャックから新しく迎える子^{やつ}が居ると聞いた」

和真がそう言うとき天海は一息挟んで言う。

「今世の幻魔がリベリオンを利用して、ある実験を試みた。」

「後は俺らと同じ境遇ってわけだ。」

引き戸が開き、短髪の紺色のジャケットとジーンズと言う格好の青年と胸元が大きく強調された(GE3と殆ど同じ格好)の格好のクレアが現れた。

「ユーゴ、クレア……となると特殊案件か」

和真が一人戦場を駆けていた理由、ジャック経由で幻魔が現代に適応した結果、出来る限り人体の中に潜み、発動条件が揃ったら幻魔化する。

新幻魔虫と仮呼称している寄生体が、リベリオンの間で横行している。

一部の狂騒的なリベリオンからすれば「新人類」等と称され、実像形態の固有^{デバイス}霊装による攻撃もあまり効力を持たない兵士が出来上がる。

ユーゴとクレア、二人はそんな狂った政権転覆を目論んだ一部のリベリオンによって新幻魔虫を一時的に宿す事になった戦争孤児で、二人は鬼武者の本懐を成し遂げていた和真、元鬼武者として裏事情に精通して最前線に出ることの出来るジャックの二人に保護され、新幻魔虫を散らす薬を処方できる天海と阿古の元で暮らしている……この「比叡青空の家」と言う孤児院は、人に戻る最後の場所である。

一台のジープが、山道を走る。

ジャックの部下である青年・レオンが運転して助手席で十歳前後の少女が怯えていた。

「大丈夫だ、もう直ぐ新しい家に着く」

レオンが優しく声をかける。が、左前頭部に角のような突起を持つ少女は俯いたままボロボロのぬいぐるみを抱えた。

「やれやれだぜ・・・隊長もこんな辺鄙な所を指定しなくても」

レオンがぼやいた。

「お疲れ、レオン。長時間運転にこの山道は堪えるだろうか？」

「はっ。」

振り向くと伐刀絶技ノウブルアーツ・羅刹迅雷を発動し、平行して走る和真にレオンは言葉を失った。